

「独学学究の人」

—青木邦男教授の定年退職に当たって—

社会福祉学部教授 田中 耕太郎

1 本学での歩み

青木教授は、高校教員を経て1982年に当時の山口女子大学の教員として赴任されて以来、講師、助教授、教授として定年まで本学で継続して勤務してこられた。その本学就任以来の業績等は別紙の通りで、研究、教育から大学運営、社会的活動に至るまで、多岐にわたって活躍された。その経歴は、そのまま本学が女子大学から共学の県立大学となり、さらに学部学科再編と独法化という、激動の時代と重なり合う。そのような大学の激しい変化の中で、氏には多くの役割を果たして頂いたが、ここで改めて氏の業績を辿りつつ、定年退職の送別の辞とさせて頂く。

2 研究者としての業績

氏がこれまでに発表してこられた研究論文の一つひとつについては、別紙の業績資料が示すとおりである。その研究業績を一覧してすぐに気づくのは、研究対象領域の広さである。研究対象は、氏の本来のスポーツ実技者としての専門領域であるバレーボールに関する研究から始まって、近年では年々社会的な関心が高まっている高齢者の心身の健康に関する領域に至るまで、広い範囲にわたり、しかも教授昇進後から定年退職の間際に至るまで、一時も中断することなく研究を継続してこられたことは、特筆に値しよう。一般に教授昇任後、大学運営業務や対外的な業務が増加する一方で、気力・体力・集中力が年齢とともに低下する中で、講座も助手も持たずに一人で地道な研究を継続し深化させることは、じつは相当に困難な課題である。若いときの精力的な研究がある時点で姿を消し、管理職に甘んじる教員が少なくないことを見れば、その難しさは容易に想像できよう。

また氏の研究論文は、本来の専門分野の代表的な専門誌である『体育学研究』、『体育の科学』、『学校保健研究』などの主要な学会誌、専門誌から『老年精神医学雑誌』まで、さらには『社会福祉学』など現在籍している学部の専門領域に関わる主要な学会誌に至るまで、幅広い領域の専門誌に掲載されている。このように、一般に採択の困難な主要な学会誌や専門誌への投稿、査読、加筆修正を経ることを通じて、いずれの論文も高い学問的な水準を維持している。このような一途な研究姿勢には、同じ大学に籍を置くものとして誇りに思うとともに、心から敬意を表したい。

本学のような地方の小さな大学は、そもそも研究環境としては物的・人的に恵まれておらず、しかも、研究中心型の大規模大学と比較すると日常的な大学・学部運営上の負担も学生教育上の負荷もはるかに重い。そのような環境下で、いわば独学に近い環境に置かれた中で、そのハンディキャップを跳ね返し、レベルの高い学会誌への投稿と査読者とのやりとりという独自の鍛錬の場を通じて、自らの学問水準の確認とレベルアップを継続してこられたその方法論は、同じく恵まれない研究環境下であって学者として志をもつ若い研究者には模範となるものであろう。

ただ、言うは易いが、それはまた同時に、長く孤独な作業でもあり、それを長年途切れることなく継続してこられた基礎には、研究者としての並々ならぬ矜持と向上心、そして強い自己規律があったものと思う。

近年はどのレベルの大学においても、外部資金の獲得、科研費への採択ということが強く求められるようになってきているが、そのようなことが言われるはるかに前から、氏は継続的に科研費を獲得し、その研究成果を論文として発表してこられた。20年以上にわたって、1年間のインターバルを挟んで途切れることなく科研費に採択され続けてきたこと自体、氏の研究が学会において確固とした評価と地位を占めていたことを端的に物語るものであろう。また、このような豊かな経験をもとに、最近では、学内の若い研究者の科研費への応募に当たってのアドバイザーを務めてこられたことも、本学の研究レベルの底上げを図る上での氏の献身といえよう。自身の研究だけでも限られた時間で手一杯の中で、同僚への支援までは手が回らない、というのが普通であろうが、ここにも氏の研究への強い思いを垣間見ることができる。

3 教育者としての功績

青木教授の業績を一覧するだけでは分からない重要な功績が、じつは教育者としての資質と活動の側面であろうと考えている。体育の実践者として、本学の運動部系のさまざまなサークルの活動を実技指導の面からはいうまでもなく、学生へのよき相談者として広く支えてこられたことは、同僚として近くの研究室で生活していたものとしてぜひ伝えておきたいと思う。

社会福祉という、体育実技とは一見関わりの薄い学部には籍を置く教員としても、そのゼミにおいて、消防士や警察官などを目指す学生への勉強面はもちろん基礎体力の強化の面でもしっかりとした指導をされ、それぞれの領域への就職を実現させてこられた。さらには、学部内に居場所を見つけきれずにいる学生や課題を抱えた学生なども広く受け入れて支え、変容させ、立派に社会に送り出してこられた。

学生支援はそれにとどまらず、一教員として、ゼミや学部さえ超えて、課題を抱えて相談に来る学生や、他の教員との間のトラブルを抱えた学生の相談・支援にも関わって来られた。さらにはカルト集団などフォローに多大の手間暇のかかる団体の被害に遭いそうになった学生のためにも、決然とリスク覚悟で対決し、学生を守ることに躊躇せず、本学全体を隅の首石として支えていただいたことも、長いつきあいの中で事情を知る者として、伝えておきたい。

そして、このような教育者としての側面は、学生への支援にとどまらず、多くの教職員が悩みの相談に訪れ、また量的研究の基礎を学びたい若い教員を対象に勉強会を開くなど、教職員への支援面での貢献も付記しておく。

4 実務家としての大学運営への貢献

青木教授のもう一つの本学への重要な貢献が教務部長、共通教育会議議長、図書館長、教育研究点検評価委員長など、さまざまな大学運営業務の責任者として、大学運営の実務を担っていただいた点にあることは衆目の一致するところであろう。

このような大学運営の管理職業は、研究をやめてその地位を希望する教員は別として、青木教授のように高い研究レベルを維持する教員にとっては、一般には事務負担が多くて敬遠されるものだが、氏は、そのときの職責に応じて時間を使って誠実にその職務をこなしてこられた。

学部運営面での全般にわたる支援についても同様だが、とりわけその統計処理の専門的知識とスキルを駆使して本学部の入試分析を手がけていただいたことは、学部の財産として今に継承されている。

おわりに ー若干の私的感慨ー

青木教授の妻さは、どんなに自分の研究で多忙な時期でも、誰が相談に来て、嫌な顔一つせず、まずは受け入れておいしいコーヒーを勧めながら相談に乗ってくれるという懐の深さであろう。そして、雑事を離れてお互いの研究を語り合うときの氏の純粋に楽しそうな表情を忘れることができない。

足かけ33年に及ぶこの高校並の小さな地方の大学での生活は、思うところも多かったであろうが、その貧しい研究環境の中で、ひたすら学会誌への投稿と科研費への応募を重ね、そこを研究者としての孤独な鍛錬の場と定め、却下される度に批判を糧に研鑽を積んで一流の研究者としての立場を築いてこられた、その継続する意思には、ただ頭が下がる思いである。学問の師を持たない私にとって、その研究へのひたむきさは、(故)上田千秋・初代社会福祉学部長の学問への真摯で厳しい自己規律の姿勢と重なり、励みの源泉でもあった。

ただ一つの心残りは、この小さな大学にあって傑出して並び立つ存在であった青木教授と三島教授が、力を重ね合うことが少なく、二人三脚でこの大学を真に質の高い全国に誇る希有の大学にリードすることができなかったことである。それを支えられなかった私たち教員のふがいなさも申し訳なく思う。

ともあれ、今回の氏を始めとする教員の退職により、まちがいなくこの大学も一つの時代を終えようとしている。さあ、次の時代は、どのような舞台が回るのだろうか。

青木先生、長い間、お世話になり、ありがとうございました。

